

大窪詩仏の紀行詩集：近世後期の詩壇における性霊 詩風の一側面

王，自強
九州大学大学院：博士後期課程

<https://doi.org/10.15017/7325741>

出版情報：語文研究. 136, pp.46-60, 2023-12-04. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：



大窪詩仏の紀行詩集

— 近世後期の詩壇における性靈詩風の一側面 —

王 自 強

はじめに

大窪詩仏（一七六七～一八三七）は、市河寛斎の江湖詩社で詩を、山本北山の奚疑塾で儒学を学び、寛斎や江湖詩社の同人である柏木如亭・菊池五山とともに性靈説を唱え、江戸の四詩家と称せられた。^{（注1）}このように、詩人としての名声を博した詩仏は、多くの漢詩人と交遊し全国各地を遊歴して、歴大な紀行詩を遺している。現存している詩仏の紀行詩集は、『西遊詩草』（二卷二冊、文政二年（一八一九）刊）、『北遊詩草』（二卷二冊、文政五年刊）、『再北遊詩草』（二卷二冊、文政八年刊）、『二島遊草』（一卷一冊、天保二年（一八三一）刊）の四つがある。

従来、大窪詩仏の研究において、伝記や初期詩集『卜居集』（寛政五年（一七九三）刊）などが注目されている。^{（注2）}しかしながら、詩仏の紀行詩に関する研究はまだなされていない。^{（注3）}また、そもそも近世紀行文に関する研究では、専ら和文体の紀行文が注目されており、漢文体の紀行文の研究はほとんど見られない。

近世後期の性靈詩風については、詩仏の『詩聖堂詩話』（寛政十一年刊）に、「寛斎先生作北里歌三十首、以見性靈之詩、莫不可言者」（寛斎先生、北里歌三十首を作り、以て性靈の詩言ふ可からざる者莫きを見はす）とあるように、寛斎の『北里歌』と性靈詩風との関係が窺える。

このあたりについては、「遊里風俗詩としての竹枝詞集『北里歌』は、性靈の詩の先進的な試みの一つ」とする掛斐高氏

の指摘がある。^(注5) 江湖詩社の柏木如亭や菊池五山が寛斎に倣い、それぞれ『吉原詞』（寛政元年成）と『深川竹枝』（寛政九年刊）を作成したのに対して、詩仏は連作の竹枝詞を詠わずに多くの紀行詩を遺し、性靈詩風を実践していた。

そこで本稿では、これまでに研究の俎上に載せられなかった詩仏の紀行詩に注目し、それらの詩に見られる地名表記、南宋の詩人楊誠齋受容および地方の性靈派の詩人との交遊などの方面から、紀行詩と性靈詩風との関係を明らかにしたい。本稿によって、近世後期の詩壇における性靈詩風の別の一面を究明することが可能となり、漢文体の紀行文の研究を進めることができようと思われる。

一、詩仏の紀行詩集における地名表記

近世後期の漢詩における地名表記と反古文辞派との関係については、すでに日野龍夫氏による考察が備わっている。^(注6) ただし、大窪詩仏の紀行詩における地名表記の問題については、これまで考察されてこなかった。この問題を検討するために、まず、詩仏の師である市河寛斎の古文辞派の地名表記への批判を見ていこう。

此邦地名、多不雅馴、可入詩者罕。而近世作家、漫以意

変易其字、如使君灘・承華渡・烏衣巷、似華則似。當時猶難的知其所、何況百年之後、令人疑且惑。（『詩燼』、天明元年（一七八一）成）

（此の邦の地名、雅馴せざること多し、詩に入るべき者、罕なり。而して近世の作家、漫に意を以て其の字を変易し、使君灘・承華渡・烏衣巷の如し、華に似れば、則ち似たり。当時、猶ほ的かに其の所を知りがたし、何ぞ況んや百年の後をや、人をして疑ひ且つ惑はしむ。）

ここに挙げられている使君灘・承華渡・烏衣巷は、^(注7) いずれも日本の地名を中国の地名に言い換えたものである。ここで言う「近世の作家」は、古文辞派の漢詩人のことを指す。寛斎によれば、日本の地名を中華風の地名に言い換えることで、詩中の地名が日本のどこを指すかが分からなくなり、読者を惑わしてしまうようになったという。

また、菊池五山は、『五山堂詩話』（文化四年刊）巻一に、右の寛斎の論を引いた上で、「余按、誠齋有句云、里名只道新名好、不道新名誤後人」（余按ずるに、誠齋句有りて云く、「里名は只だ道ふ新名好し、道はず 新名の後人を誤るを」と）と述べている。五山が引いた誠齋の詩は、七言絶句「三月三日、上忠襄墳。因之行散、得絶句」（三月三日、忠襄墳に上る。之に因て行散し、絶句を得たり）の二句であり、詩仏ら

が訓点を施した『楊誠齋詩鈔』（文化五年刊）に収録されている。

五山は、寛齋の文言と誠齋の詩を引用したが、二者の連繫を説明して^(注8)いない。誠齋の詩は、里の名称を新しい名称に改めるのは良いことだと言われたが、新しい名称は後人を惑わせるという意味である。古文辞派が作詩に際して、日本のある場所の名称を変更して作った中華風の地名は、当時の人にとって、新しい名称だと言えよう。こうした詩中の中華風のかつ新たな地名表記は、寛齋・五山の時代の人を惑わせたのである。このように見ると、寛齋の地名表記に関する批判は、楊誠齋の詩と軌を一にするものであらう。

このような江湖詩社の主張は、後年詩仏と親交があった伊勢の詩人津阪東陽に受けつがれた。東陽は『夜航詩話』（文化十三年序、天保七年刊）巻一に、

我邦凡百称呼、多不雅馴。而地名特甚也。先輩病其難入詩、往往私修改之。〈中略〉徂徠・南郭輩如改諏訪湖為鵝湖、岡崎城為豊沛、目黒山為驪山、白山為商山、胡乱牽強、是誠何義也。

（我邦凡百の称呼、多くは雅馴ならず。而して地名は特に甚しきなり。先輩、其の詩に入れがたきを病み、往々私に之を修改す。〈中略〉徂徠・南郭輩、諏訪湖を改めて鵝

湖と為し、岡崎城を豊沛と為し、目黒山を驪山と為し、白山を商山と為すが如きは、胡乱牽強、是れ誠に何の義や。）

と書いている。徂徠・南郭らの古文辞派は、諏訪湖を中国の鵝湖に、岡崎城を中国の豊沛に、目黒山を中国の驪山に、白山を中国の商山に書き換えていると東陽は指摘した。例えば、『徂徠集』に驪山を詠う詩がある（『徂徠集』巻六所収、元文元年（一七三六）序刊）。

春日、陪西台侯遊驪山分韻（春日、西台侯に陪ひ驪山に遊びて韻を分かつ）

高台宴罷散珠蹄 高台 宴罷みて珠蹄散らす

才子多情醉欲迷 才子 多情 酔ひて迷はんと欲す

不惜桜花飛作雨 惜しまず 桜花飛びて雨を作すを

行雲本在驪山西 行雲 本より驪山の西に在り

「驪山」はもともと唐代長安付近の名所であるが、ここでは目黒を意味する。^(注9)宝暦十年（一七六〇）、永田観鷺によって刊行された『大東詩家地名考』には、「驪山、メグロ。黒馬ヲ驪ト云ヘバナリ。南郭詩、驪山二月闌^{シム}芳菲^ラ」。泰叡山龍泉寺と云不動ノ靈区」と記されている。

徂徠一門においては、驪山のほか、江戸は「東都」「江都」「武昌」「武陵」などの中華風の地名に書き換えられている。^(注10)

このような日本の地名を中華風に書き換えた詩を作成するために、宝暦期に地名表記の用例を網羅した地名考や地名箋などの書物が編まれた。右に示した『大東詩家地名考』は、その一つである。こうした地名考の書物は、古文辞派の漢詩における地名表記を理解するために作られたものとも言える。

前述のように、寛斎は、古文辞派の地名表記を批判した。こうした批判的発言を出した五年後の天明六年に上梓された『寛斎摘草』巻四に、「下仁田雑詠」七首と「砥沢六詠」六首の連作の五言絶句が収録されている。その連作の中の詩題「鐺川」や「鷹巢古城」および「南牧関」は、いずれも群馬県の名地名である。ただし、寛斎の漢詩作品を精査したところ、日本語の地名表記が使われるのは、基本的に詩題に限られており、詩の本文には見られない。

化政期に入り、寛斎の地名表記に関する主張を徹底的に実践したのは、江湖詩社の同人大窪詩仏である。詩仏の『西遊詩草』や『北遊詩草』などの紀行詩集には、「根府川道中」「清見寺」「金沢城」などの日本の地名を詩題とするものが多い。また、これらの紀行詩集の漢詩の本文にも日本語の地名が頻繁に使われている。その例は、以下のとおり。

詩集	詩題	漢詩
『遊西詩草』	「宇治橋上矚目」 「中納言日野公、席上賦之奉呈」	宇治橋頭日欲頽、紅楓兩岸錦成堆。 憶得春來落花節、品川驛裏送君歸。
『遊北詩草』	「津幡驛、次梅逸見送韻」 「留別東亭」	故人遠送津幡驛、真箇今宵是客愁。 他日相思君合記、滑川驛裏和詩時。
『遊北詩草』	「糸魚川」 「赤倉温泉 其の四」	糸魚川驛小繁華、丁字為街千百家。 殘夜每無雲一點、妙高山上月輪寒。
『遊鳥詩草』	「壺碑」 「扇亭德望」	多賀城荒余故墟、千年遺跡一碑孤。 休嘆少句酬清景、松島古來無一詩。

右の一覧表のように、京都の「宇治橋」や新潟県の「糸魚川驛」および宮城県の名地名は、いずれも日本語の地名表記である。このような漢詩は、古文辞派が詠んだ中華風の漢詩とはまったく異なり、旅行先の地名をそのまま詠じた、ある意味写実的な作品だと言えよう。詩仏の紀行詩に見る写実的表現に関して、大田錦城は『西遊詩草』の序文に、次のように述べている。

予乃披卷覽數篇、斂襟語之曰、凡詩出於率意者、情景皆真、足以動人。出於雕琢者、意興此假、其言雖巧、不足感人。《中略》是皆羈旅率意之作、然其情景能感動人。千歲之下、想像其境、如目擊而親見也。

（予、乃ち巻を披ひて数篇を覽、襟を斂めて之を語りて曰く、「凡そ詩は率意に出づる者、情景皆真たり、以て人を動かすに足る。雕琢に出づる者、意興此を仮にして、其の言巧みと雖ども、人を感じずるに足らず」と。（中略）是れ皆羈旅の率意の作、然れども其の情景は能く人を感動す。千歳の下、其の境を想像り、目撃して親ら見るが如きなり。）

詩仏の紀行詩は、いずれも読者を感動させる「羈旅の率意の作」であり、「情景皆真」の作品でもあると錦城は指摘していた。こうした「真」の詩の作り方について、詩仏は『詩聖堂詩話』に、次のような寛斎の言を引いている。

学詩、一求之目之前、不必求之遠。先生此言、痛中今人之病、故録于此。

（「詩を学ぶは、一に之れを目の前に求め、必ずしも之れを遠きに求めず」と。先生の此の言、痛く今人の病に中る。故に此に録す。）

詩仏の紀行詩における「目の前」の風物は、もちろん中華風のものではなく、「宇治橋」や「多賀城」といった日本の景色である。中村幸彦氏は写実主義と性霊詩風との関係について、「（性霊詩は）護園の風雅論下に於ける、子君子の気宇を示すとして、華麗にして格調をほこる作品を廢して、現実の対

象を反映した自己の性霊を詩にうつす写実的な作品を求める」と述べている。^{（注1）}

このように、目の前の旅行先の地名を詠作する漢詩においては、地方の独特な風物が写實的に詠まれていた。詩仏の漢詩に詠まれた地方の風物の種類について、加賀の漢詩人林蓀坡は『北遊詩草』の序文に、「山水之奇秀、樓亭之勝覽。自一草一木至飲食之微」（山水の奇秀、樓亭の勝覽。一草一木より飲食の微に至る）と記している。ここで注目したいのは、詩仏の紀行詩に多く詠まれた「山水の奇秀」である。それについては、次節で詳しく検討する。

二、詩仏の紀行詩に見る「奇」と「誠齋体」

江湖詩社を中心とする近世後期の性霊派詩人と平淡流暢な宋代詩風との関連については、よく知られている。^{（注2）}しかしながら、詩仏が尊重する新奇な詩風については、まだ十分には知られていない。新奇な詩風とはいったい何だったのかについて、まず詩仏の『詩聖堂詩話』を見てみよう。

詩貴平淡。平淡詩之上乗也。然平淡不經奇險中来、則徒是村嫗絮談耳、全無氣力焉。故学詩先覓奇險、而後溫雅、而後平淡。

（詩は平淡を貴ぶ。平淡は詩の上乗なり。然れども平淡は奇險中を経て来たらざれば、則ち徒らに是れ村嫗の絮談のみ、全く氣力無し。故に詩を学ぶは先づ奇險を覓め、而して後に温雅、而して後に平淡なり。）

詩仏は、平易な詩風を形成する前に、新奇な詩風を学ばなければならぬと主張している。詩の平淡は、詩仏の言のように、もし「奇險中を経て」作られなければ、単なる「村嫗の絮談」のような俚俗に陥りかねない。当時の詩壇における俚俗の詩風について、詩仏は寛齋編『三家妙絶』（文化四年刊）の序文で、「世の宋詩を学ぶ者、尚ほ未だ詭僻・險怪・備瑣・鄙俚を免れず」（世之学宋詩者、尚未免詭僻險怪備瑣鄙俚）と記していた。ここの「險怪」は怪しいという意味であり、珍しさを意味する「奇險」とは若干ニュアンスが異なると考えられる。詩の「奇險」に関しては、石井錦江が『二鳥遊草』の跋文に説明している。

勝地得名士、而其奇益顯。名士亦得勝地、而其才愈奇。此二者可不相待、而成其奇哉。今開此帖、松島・塩竈、及我雄鹿郎湖之奇景、驀然現於几席之間、審於飽聞飽見也。可不謂名士勝地之奇遇哉。然其詩亦極奇險之變、而不能免眼小如豆之士之笑罵。所謂不笑、則不足以為道也者歟。（勝地に名士を得て、其の奇益々顯らかなり。名士も亦た

勝地を得て、其の才愈々奇なり。此の二者相待たざるべくして、其の奇と成るや。今此の帖を開き、松島・塩竈、及び我が雄鹿郎湖の奇景、驀然として几席の間に現れ、飽聞飽見を審らかにす。名士勝地の奇遇と謂はざるべけんや。然れども其の詩も亦た極めて奇險の變、而して眼小、豆の如きの士の笑罵を免れること能はず。所謂笑はざれば、則ち以て道ふと為すに足らざるものか。）

名所は名士の作品における描写を通して、その風景の珍しさがより世に知られるようになる。一方、名士は名所を描くことで、自分の才能を十分に發揮することができる。このように、名所の奇景は名士の奇才と緊密な関係を持っているのである。『二鳥遊草』に収められた松島などの名所を詠じる漢詩は、まさしく詩仏の奇才をあらわした作品である。また、「奇險の變」の「變」とは、「奇」の多様性を意味する。詩仏の紀行詩には、「奇」の詩語が頻繁に用いられている。以下は詩仏の紀行詩集における「奇」の一覧表である。

詩集		詩題	
『西遊詩草』		漢詩	
「題植松思齋宅」		家在塵中不染塵、 [奇書]名帖机頭陳。	
「題植松氏弁仙閣」		果爾今朝弁仙閣、 [奇花]異草各知名。	
「閑筆山」		[奇松怪石]寫難真、 自古画工無絶倫。	

詩集	詩題	漢詩
『北遊詩草』	「高嶠道中」	野草花開瞥眼過、轎簾半捲看過時。
	「和長崎浩齋見贈」	渡水經村又上危、乍晴乍雨景都奇。
	「那谷寺」	大士山中霜染楓、怪巖奇石錦屏中。
	「赤倉温泉 其五」	平日曾無今日奇、闌干倚遍立多時。
『再北遊詩草』	「遊伊藤大夫別業 席間得六絕句」	千年一奇樹、人見不知名。
	「鳩巖瀑布」	一場奇夢醒猶記、直駕銀鳶上九天。
『二島遊草』	「松島」	怪怪奇奇更怪奇、怪奇之外讀無辭。

以上のように、詩仏は紀行詩に「奇書」「奇花」「奇松」「奇石」「奇樹」などのような具体的な「奇」を詠むのみならず、「今日奇」「奇夢」のような抽象的な「奇」も詠んでいる。これらの「奇」なる風景は、いずれも旅行の途中や旅行先で、詩仏が直接見たものである。例えば、右に引いた『二島遊草』の「松島」詩を見てみよう。

怪怪奇奇更怪奇 怪怪奇奇 更に怪奇たり
怪奇之外讀無辭 怪奇の外 讀するに辭無し
鳳翔鸞舞松同態 鳳翔鸞舞 松は態を同じうす
虎踞竜蟠石異姿 虎踞竜蟠 石は姿を異にす
詩仏は「奇」の語を繰り返して用い、松島の風景の珍しさ

や素晴らしさを称賛している。

ところで、詩仏の養子謙は『二島遊草』の跋文に、このような奇景を詠む際、南宋の詩人楊誠齋の詩風である「誠齋体」に倣わなければならないと、詩仏の論を引いている。

家君常謂、「凡遇難遇之景、言難言之景、非做誠齋体不能尽為」。《中略》松島之景、予所欲言、家君已尽之。或疑其詩之奇險、蓋不知詩者也。八郎湖雄鹿之一勝、予未到其地。而以松島徵之、則真景可想而已。

（家君常に謂く、「凡そ遇ひがたきの景に遇ひ、言ひがたきの景を言はば、誠齋体^{（注13）}に倣ふに非ざれば尽し為すこと能はず」と。《中略》松島の景、予言はんと欲する所、家君已に之を尽くす。或は其の詩の奇險を疑ふは、蓋し詩を知らざる者なり。八郎湖雄鹿の一勝、予未だ其の地に到らず。而して松島を以て之を徴すれば、則ち真の景を想ふべきのみ。）

前節で述べたように、詩仏らは、文化五年に訓点を施した楊誠齋の単独の詩集『楊誠齋詩鈔』を上梓した。この詩集に収められた作品には、多くの「奇」の詩語が見られる。中でも、「二者相遭兎甌面、怪怪奇奇真善幻」（二者相ひ遭ふ 兎甌の面、怪怪奇奇 真に善く幻し^{（注13）}）は、「怪怪奇奇」の語を使用しており、右に引いた詩仏の松島詩の表現とまったく同じ

である。「奇」については、さまざまな表現があるが、楊誠齋詩集の和刻本を出した詩仏は、やはり誠齋からその「怪怪奇奇」の表現を学んだだろう。

また、詩仏の『北遊詩草』においても、「誠齋体」に倣って作られた詩が散見される。

詩題	詩題の割注	漢詩
「右絳雪吟窠」	楊誠齋、紫微詩、晴霞艶艶覆檐牙、絳雪霏霏落御沙。	紫微花発処、絳雪映檐牙。
「右錦繡堆」	誠齋詩、故園海棠今日開、夢入江西錦繡堆。	天下海棠絶、蜀有碧鷄坊。君家錦繡堆、足以相比方。

「右絳雪吟窠」と「右錦繡堆」は、連作「海棠園十二勝」の二首である。詩仏はその詩題の下に割注で、参照した楊誠齋の詩句を明示している。同連作の別詩には、陸放翁や蘇東坡の詩への言及が見られるが、詩仏の漢詩においては、楊誠齋への特別な関心があるのではないかと考えている。また、誠齋の詩風について、亀田鵬斎は、『楊誠齋詩鈔』の序文に「其詩尽脱諸家之風、偏精独詣、别出機杼。乃是一種之創体也」（其の詩、尽く諸家の風を脱し、偏に独詣に精し、別に機杼を出だす。乃ち是れ一種の創体なり）と高く評価している。

こうした独創の詩体と言われた「誠齋体」と性靈説との関わりについて、大田錦城は『楊誠齋詩鈔』序文で、

予曰、誠齋之詩、昔人病其俚俗。然其豪放雄厲、発舒性靈、無復檢束。意所欲言、無所不言、毫無塗沢媚世之氣。此亦千古之一人耳。医偽唐之病、莫神焉。

（予曰く、「誠齋の詩、昔の人は其の俚俗を病む。然れども其の豪放・雄厲、性靈を発舒し、復た檢束無し。意を言はんと欲する所、言はざる所無し、毫も塗沢、世に媚ぶる氣無し。此れも亦た千古の一人のみ。偽唐の病を医やし、焉より神なるは莫し」と。）

と述べている。誠齋の詩は、詩人の「言はんと欲する所」に「言はざる所無」く、性靈をあらわしたものである。そして、このような性靈詩は偽唐詩の病を治す薬であるという。菊池五山が『五山堂詩話』卷一に、

袁子才不喜黄山谷、而喜楊誠齋。与余天性若有暗合。然不特余也、喜黄者絶少、喜楊者常多。蓋黃詩奥峭、耳苦艱澁。楊詩尖新、易入心脾故也。

（袁子才は黄山谷を喜ばずして、楊誠齋を喜ぶ。余が天性と暗合有るが若し。然れども特に余のみならざるなり、黄を喜ぶ者は絶えて少く、楊を喜ぶ者は常に多し。蓋し黄詩は奥峭にして、耳、艱澁を苦しむ。楊詩は尖新にし

て、心脾に入り易きが故なり。」

と書いたように、誠齋の詩は清の性靈派詩人である袁枚（字は子才）にも影響を与えており、人の「心脾に入り易いものである。」

享和・文化頃、江湖詩社を中心とする詩人たちは、性靈詩風を促すために、楊誠齋単独の詩集以外にも、楊誠齋・范石湖・陸放翁という三家の詩をまとめた詩集を出版した。まず、享和三年（一八〇三）、大窪詩仏と山本信謹は、『宋三大家絶句』を編んだ。巻頭には山本北山の序文があり、北山はそこで「蓋偽唐詩選行於世、而後詩世界如黑騰騰夜国」（蓋し偽唐詩選は世に行はれ、而して後の詩の世界は黒騰騰たる夜の国の如し）と述べ、三家詩に倣った詩風革新の重要性を強調した。その後、市河寛斎編『三家妙絶』（文化四年刊）と大窪詩仏・菊池五山編『広三大家絶句』（文化九年刊）が世に出された。^{（注1）}

このように見てゆくと、『二島遊草』の跋文に言及される「誠齋体に倣」う説は、このような近世後期の性靈派の、反古文辞派の営為の流れの中に生まれたものであろう。

三、詩仏の紀行詩集と上方・地方の性靈派詩人

三一、「西遊詩草」と東海・上方の詩壇

化政期頃、中央詩壇と地方詩壇との間では活発な交流が行われていた。当時の詩壇において、江戸と地方や江戸と上方の関係は、大きな問題であるが、別稿で考察を行いたい。本節では、詩仏の紀行詩集に注目し、詩仏と地方・上方の性靈派詩人との関係を論述する。

文政元年夏、詩仏は江戸を発ち、東海道を西上して大坂・京都に滞在し、同年の年末に江戸に帰った。翌年、詩仏は二〇一首の漢詩を集め、『西遊詩草』を上梓した。この詩集に言及される東海詩壇と上方詩壇の文人は六十七人に至るが、その中には、詩仏と同じ性靈詩風を唱える漢詩人が存していた。詩仏はこの西遊の途中で、東海道藤枝宿の詩人かつ旅籠の主人である石野雲嶺に三首の七言絶句を贈った。その中の一首を見てみよう。

贈石野雲嶺（石野雲嶺に贈る）

善画善書兼善曲

画を善くし書を善くし兼て曲を善くす

就中詩句最清新

就中詩句は最も清新なり

誰知灑落真才子

誰か知らんや灑落たる真才子

却在羈亭旧主人 却て羈亭の旧主人に在らんと

詩仏は、「清新」と「灑落」という言葉を用いて、雲嶺の漢詩と人格を高く評価していた。雲嶺の師である大家荷溪は、詩仏に漢詩を学んで、藤枝に水月社を運営し、雲嶺のような性霊派の詩人を育てた。『西遊詩草』には「香遠山房」と「題香遠山房」二首の詩があるが、この「香遠山房」は、荷溪の書齋である。東海詩壇の性霊派について、五山の『五山堂詩話・補遺』（文政七年刊）巻二に、次のような文章がある。

駿中清新之詩、荷溪唱之、雲嶺和之。繼之者有晴橋。經歲之久、杜盟屢渝。可亭為客之日所創「水月社」、今已散潰。可亭亦尋亡。「水月」二字、頗似成讖。雲嶺・晴橋、重収余燼、改命曰「樵雲社」。新進穎脫、得大家桂巖・雪溪伯仲二子。

（駿中清新の詩、荷溪、之を唱へ、雲嶺、之を和す。之に繼ぐ者、晴橋有り。歳を経るの久しき、杜盟屢々渝^かはる。可亭、客為るの日に創する所の「水月社」、今已に散潰す。可亭も亦た尋ねて亡くす。「水月」の二字、頗る讖を成るに似たり。雲嶺・晴橋、重ねて余燼を収め、改めて命じて「樵雲社」と曰ふ。新進穎脫、大家桂巖・雪溪伯仲二子を得る。）

五山が述べたように、東海詩壇の性霊派の中心的詩人は、

荷溪と雲嶺であつた。水月社を創立した可亭は、山本北山の門人間野可亭^{（注15）}を指す。可亭の死後、雲嶺らは「水月社」を母体として、改めて「樵雲社」を結成し、新進の詩人を育成した。以上のように見てゆくと、石野雲嶺を中心とした東海詩壇の性霊派の詩人たちは、詩仏や可亭らの江戸の性霊派と深い関係を持っていたと考えられる。

『西遊詩草』巻二の詩「八月廿七日到京師、翌日同梅逸遊南禪寺」（八月廿七日京師に到り、翌日梅逸ともに南禪寺に遊ぶ）を見れば、詩仏は文政元年八月二十七日に、京都に到着したことが分かる。数日後、詩仏は京都の詩人梅辻春樵らとともに四条橋の酒樓に会食し、「同琴春樵・稻藜園・馬島松南・山本梅逸、飲四条橋酒樓」（琴春樵・稻藜園・馬島松南・山本梅逸ともに四条橋の酒樓に飲む）の七言絶句を詠んだ。

梅辻春樵、別姓は琴、字は延調。村瀬栲亭に学び、古文辞派の唐詩摸擬を批判していた。春樵の詩作について、栲亭は『春樵詩草』（文化八年刊）の序文で以下のように述べている。

余故曰、「境真情真事真、則近自然。近自然、則字穩語順。不論漢魏唐宋元明。得到此地位、此謂之真詩。若乃剽窃摸擬、言非自己出、則不啻欺人。亦自誣耳」。《中略》
琴延調蚤歲從余遊、斐然業已成。然猶且底勵刻責、一洗偽体之弊、卓為一家。

（余、故に曰く、「境真にし情真にし事真にすれば、則ち自然に近し。自然に近ければ、則ち字穩語順なり。漢魏唐宋元明を論せず。此の地位に到ることを得、此之を真詩と謂ふ。若し乃ち剽窃摸擬、言已より出るに非ざれば、則ち啻に人を欺くのみならず。亦た自ら誣るのみ」と。〈中略〉琴延調、蚤歳余に従ひて遊び、斐然として業已に成る。然れども猶ほ且つ底勵・刻責して、偽体の弊を一洗し、卓として一家と為す。）」

栲亭が述べた「剽窃摸擬」は、言うまでもなく古文辞派の摸擬主義を指す。春樵が「真詩」をもつて摸擬詩風を一掃し、京都詩壇の一家となったという栲亭の指摘は正鵠を射ている。栲亭の詩風に関して、鷺原具仁子氏は「村瀬栲亭は、この詩風の転換を経験した詩人の一人で、初学の頃は、古文辞派が手本とした『唐詩選』を学んだと伝えられるが、後に清新性靈派の詩論・詩風の影響を受けた」と指摘している。^{注16}とするならば、栲亭の高弟としての春樵は、むしろ性靈派から影響を受けたと考えられる。

このように、詩仏は上方遊歴に際して、すでに性靈詩風を実践していた春樵と交遊したり詩を作ったりして、当時の京都詩壇における性靈詩風を活性化させたと思われる。

『西遊詩草』を見ると、詩仏と東海・上方詩壇の性靈詩風を

唱える詩人との交遊関係の一端が窺えた。次節では、『北遊詩草』『再北遊詩草』から北陸詩壇との関係を見てゆく。

三二、『北遊詩草』『再北遊詩草』と北陸詩壇

文政四年秋、詩仏は江戸を発つて金沢に行った。翌年、彼は金沢で詠んだ詩と当地の詩人たちが作った唱和詩を集め、『北遊詩草』を刊行した。北陸詩壇の詩人三十五人は、金沢で越年した詩仏とともに、詩会を開催したり北陸の名所を巡ったりした。文政七年夏、詩仏は再び金沢へと旅立ち、翌年六十名の北陸詩壇の詩人との唱和詩を集めた『再北遊詩草』を出版した。^{（金沢）}本節では、この両紀行詩集に見られる性靈派の詩人に注目したい。まず、『北遊詩草』に収録された詩仏の唱和詩を掲げる。

次韻林蓀坡先生見贈 其二（林蓀坡先生に贈るを見る韻に次す 其の二）

安穩金城旧酒盟 安穩たり 金城旧酒の盟

新詩語語使人驚 新詩の語語 人をして驚かしむ

細思物理無如醉 細かに物理を思ひ 酔ふに如くは無し

世上何須身後名 世上 何ぞ須^{もち}めん身後の名

林蓀坡は加賀の儒学者・漢詩人で、若い頃、江戸の昌平黌に学んだ。「金城」は金沢を意味し、「旧酒の盟」は詩仏と蓀

坡との交遊關係を指すのであろう。この交遊關係について、『北遊詩草』の附録に収められた蓀坡の詩の序文に、「辛巳秋九月、詩仏先生來遊敝邑。一別已經十二霜、今得再逢喜賦」(辛巳秋九月、詩仏先生敝邑に遊び来る。一別して已に十二霜を経、今再び逢ふを得ることを喜んで賦す)と書かれている。文化六年春、詩仏は蓀坡に七言絶句「送林孚尹婦加賀」(林孚尹の加賀に帰るを送る、『詩聖堂詩集初編』卷九所収)を贈った。孚尹は蓀坡の字。この面会は、『北遊詩草』において「酒盟」と詠まれている。その後、蓀坡は『梧窓詩話』(文化九年刊)の中で、性靈派の影響を受けて性靈説を唱えた。詩道之本事、直吐出性情而已。性情極不凡、而其語自精妙。如尋常拘攣一生隨前人脚跟者、非所能及也。

(詩道の本事は、直ちに性情を吐出するのみ。性情極めて凡ならずして、其の語自ら精妙たり。尋常拘攣して一生前人の脚跟に隨ふ者の如き、能く及ぶ所に非ず。)

近世後期、性靈説の紹介に尽力した山本北山は、天明三年刊の『作詩志穀』巻一において、「袁中郎コ、二見ル」有テ、格式ヲ寛ス。寛シト雖ドモ、古今一定ノ格ヲ棄ルニ非ズ。詩ハモト性情ヲ吟詠スルニ過ザル」と記していた。また、後年大窪詩仏は、『詩聖堂詩話』に「寛斎先生、嘗論詩云、詩本風情。不求之風趣、而求之格調、抑遠矣哉」(寛斎先生、嘗て詩

を論じて云く、「詩は風情に本づく。之を風趣に求めずして、之を格調に求むるは、抑遠きかな」と)と、寛斎の論を用いている。

以上のように、蓀坡の詩観は、北山・寛斎・詩仏の性靈派によつて鼓吹された性靈説と方向性を一にするものであろう。また、文政九年、蓀坡は『致堂詩臺』序文の中で、横山致堂の詩に對して、

覃心研精、斟酌事理、玩繹物情、飲醇咀粹、以養其性靈之和。

(覃心して研精し、事理を斟酌し、物情を玩繹し、醇を飲みて粹を咀み、以て其の性靈の和を養ふ。)

という評価を与えた。このように見ると、致堂は、蓀坡と同じく加賀の性靈詩風を実践した漢詩人だったと分かる。『北遊詩草』には、詩仏が詠じた致堂への唱和詩が十一首収められている。その中の七言律詩「三和前韻」(三たび前の韻に和す)の尾聯において、「早起無端聞鵲語、新詩果爾使人伝」(早起端無く鵲語を聞く、新詩果爾人をして伝へしむ)とあるが、この「新詩」の語は、先の「林蓀坡先生に贈るを見る韻に次す 其の二」の詩にも使われたもので、性靈派の新し詩風によつて詠まれた詩という意味であろう。

『再北遊詩草』の巻末に、越中の漢詩人東林雪象は、七言絶

句の題辭を遺している。

江湖一自唱清新、
才子如雲追後塵、
才子雲の如し 後塵を追ふ

請看文華遍環宇、
請ふ看よ 文華環宇に遍きを^{あまね}

寒鄉僻邑亦多人、
寒鄉僻邑も亦た人多し

詩の前半は、江湖詩社によって鼓吹された性靈詩風は多くの漢詩人に影響をもたらし、の意。後半の「寒鄉僻邑」の語は、地方の詩壇を意味する。この題辭から、化政期の詩壇において性靈詩風が流行していた様子が窺える。

以上、詩仏の紀行詩集に見る地方の性靈派詩人との交遊關係を考察した。ただし、詩仏の遊歴には、純粹な文学的交流のほか、潤筆料の取得という一面もあった。それについて、掛斐高氏は「遊歴で稼いだ潤筆料をもとに、江戸神田お玉が池に詩聖堂と名付ける新居を構えることになった」という具体的な例を挙げて説明している。^(注1) また、仙台の文人画家菅井梅閑は、菊坪なる人物に宛てた書簡に、詩仏は紀行詩集『二島遊草』の刊行によって百両の金子を稼いだと書いている。^(注1)

しかし、そのような一面もあったとは言え、詩仏の地方遊歴によって、性靈詩風が地方の詩壇にまで普及したという事実は、中央詩壇と地方詩壇との交流の実態を説明する上で、重要だと言わねばならないだろう。

おわりに

本稿では、大窪詩仏の紀行詩集における地名表記や「誠齋体」受容および地方の性靈派詩人との交遊という観点から、彼の紀行詩集と性靈詩風との關係を考察した。具体的には、紀行詩の本文に日本語の地名を用いることは、徂徠一門の地名表記への反発という意味合いがあったと言える。また、「誠齋体」から影響を受けて詩中に「奇」の詩語を多用するという傾向は、江湖詩社を中心とする漢詩人たちの宋詩尊重論と緊密な關係にある。このように、詩仏は性靈詩風を実践して紀行詩を詠じ、地方遊歴を通して、地方の詩壇における性靈詩風の普及を促進した。

注

注1 『今四家絶句』（文化十二年刊）に寄せた亀田鵬斎の序文に、「我

江戸今日之詩、河寛斎唱之、柏如亭・窪詩仏・池五山和之。風流俊采、皆一代之選也。因時人概稱之曰江戶四家」（我が江戸今日の詩、河寛斎之を唱へ、柏如亭・窪詩仏・池五山之和す。風流俊采、皆一代之選なり。因て時人概ね之を称して江戶四家と曰ふ）とあり、寛斎・如亭・詩仏・五山は「江戶四家」と称せられていた。

注2 大窪詩仏の伝記研究については、鈴木碧堂氏の『大窪詩佛』（珂

北郷土研究会、一九三七年）と大森林造氏の『大窪詩仏ノート』（梓書房、一九九八年）がある。両書は詩仏の遊歴と四つの紀行詩集に言及しているが、紀行詩と性霊詩風との関係に触れていない。つぎに、揖斐高氏は、『詩人の遊歴』（江戸の詩壇のジャーナリズム——『五山堂詩話』の世界——）角川書店、二〇〇一年）において、詩仏の遊歴と収入との関係を考察したが、その四つの紀行詩集の内容をほとんど分析していない。さらに、山口句氏は『大窪詩仏初期詩集にみる評語について——習作期における問題意識——』（『成蹊国文』第四四号、二〇一一年三月）や『點化の妙』——大窪詩佛における古句受容の展開——（『成蹊国文』第四八号、二〇一五年三月）などの論文の中で、主に詩仏の初期詩集を考察した。最後に、張洵氏は『江戸後期の職業詩人研究——大窪詩仏を中心として——』（早稲田大学出版部、二〇一五年）において、詩仏の詩文を考察したが、紀行詩をまったく論じていない。

注3 『紀行日本漢詩』巻一（富士川英郎・佐野正巳編、汲古書院、一九九一年）においては、『西遊詩草』や『北遊詩草』および『再北遊詩草』という三つの影印本が収録されている。だが、それらの紀行詩集の分析がまだ行われていない。

注4 代表的なもので言えば、板坂耀子氏の『江戸を歩く——近世紀行文の世界——』（葦書房、一九九三年）、『江戸の旅と文学』（ぺりかん社、一九九三年）、『江戸の旅を読む』（ぺりかん社、二〇〇二年）および『江戸の紀行文』（中央公論新社、二〇一一年）などの系統的な研究が挙げられる。

注5 揖斐高「竹枝の時代——江戸後期の風俗詩——」（『江戸詩歌論』汲古書院、一九九八年）一六八頁。

注6 日野龍夫「漢詩の近代化——地名の表記をめぐる——」（『日

注7 野龍夫著述集』第三巻、ぺりかん社、二〇〇五年）。

揖斐高氏は、使君灘は江戸橋下流の渡しで、使君灘は御厩河岸だと指摘している（『日本詩史 五山堂詩話』、『新日本古典文学大系』第六五巻、清水茂・揖斐高・大谷雅夫校注、岩波書店、一九九一年、一八四頁）。また、日野龍夫氏は、『使君灘』が鎧の渡（現中央区鎧渡あたり）、（承華渡）が御厩河岸（現台東区蔵前あたり）とは、前出『東藻会彙纂略』によって判明するが、『烏衣巷』は知りたい。上野黒門町のことであろうか」と述べている（前掲注6に同じ、五〇〇頁）。

注8 津阪東陽は『夜航詩話』巻一の中で、古文辞派の地名の使い方を批判したときに、この楊誠齋の二句の詩を引いた上で、「可見此弊、宋人作俑。至明李王輩、謂燕京為長安、以便其声調。遂波及此方、致紊輿志、名実俱亡。不唯風雅之罪人也」（此弊は、宋人俑を作るを見るべし。明の李・王の輩に至りて、燕京を謂ひて長安と為し、以て其の声調に便す。遂に此の方に波及し、輿志を紊し名実俱に亡ぶるを致す。唯に風雅の罪人たるのみならざるなり）と書き、楊誠齋の詩と地名表記への批判との繋がりに触れている。

注9 胡正怡氏は、徂徠の『南留別志』を引いた上で、目黒を驪山にする理由を考察している（『地名表記から見る漢詩の作り方——古文辞派を中心に——』（『国語国文』第八二巻、二〇一三年十一月、三四頁）。

注10 前掲注6に同じ、四九一頁。

注11 中村幸彦「清新論的文学観」（『中村幸彦著述集』第一巻、中央公論社、一九八二年）三九五頁。

注12 富士川英郎「江湖社の詩人たち」（『江戸後期の詩人たち』筑摩書房、一九七三年）九四頁。揖斐高「化政期詩人の地方と中央

——佐羽淡齋を中心に——」〔『江戸詩歌論』汲古書院、一九九八年〕三〇六頁、三〇九頁。

注13 『楊誠齋詩鈔』卷二に収録された「澹庵坐上、観顯上人分茶」（澹庵の坐上に顯上人茶を分かつを観る）の二句である。

注14 こうした一連の「三家詩」出版の風潮については、揖斐高氏が「化政期詩人の地方と中央——佐羽淡齋を中心に——」〔『江戸詩歌論』汲古書院、一九九八年、三〇七頁〕に若干触れておられる。また、近世後期の性霊派における楊誠齋の受容は重要な問題であるが、紙幅の関係で、それについては、別稿に譲ることにする。

注15 「荷溪と可亭」〔静岡県史・通史編四』静岡県編、静岡県出版、一九九七年〕四四七頁。また、山口句氏は『五山堂詩話』に見る間野可亭——地方漢詩壇における役割——〔『成蹊国文』第四三号、二〇一〇年三月〕の中で、可亭と江湖詩社を中心とする性霊派との関係を考察した。

注16 鷺原具仁子「漢詩における社会批判——村瀬栲亭と梅辻春樵——」〔『国文学・解釈と鑑賞』第七四号、二〇〇九年三月〕一〇〇頁。

注17 揖斐高氏は、詩仏の二回の北遊について、「地方在住の詩人たちが江戸の流行詩人詩仏の遊歴をいかに熱狂的に歓迎したかを窺い知ることができる」と述べている（前掲注2の三つ目の文献に同じ、九五頁）。

注18 前掲注2の三つ目の文献に同じ、九三頁。

注19 「昨年十月秋田今天民老人松島見物ニ仙台へ参り小生即案内仕、詩数首相出、秋田雄鹿の詩と小生少々画入ニ而『二鳥遊草』と申、仙台ニ而上木仕候。《中略》黄物は百両から取申候。六人ニ而逗留之諸雜用ヲ引、仙台ニ而品物ヲ如許七十両ほと持帰

申候」〔藤富史花「江湖詩社詩人の詩文に見る《窮者而後工》の受容と理解」『和漢比較文学』第六二号、二〇一九年二月、四九頁〕。

※本稿では、引用に際して、旧字体や異体字を新字体に改めた。また、傍点や傍線は筆者による。

〔付記〕

本稿は、二〇二二年度九州大学国語国文学会の口頭発表に基づくものです。発表の席上、ご教示を賜った方々に厚く御礼申し上げます。本研究は、JST次世代研究者挑戦的研究プログラム JPMJSP21365 支援を受けたものです。

（おう じきよう・本学大学院博士後期課程）